

大倉邦彦と富士見幼稚園二〇年のあゆみ

― 戦前・戦中の私立幼稚園の資料から ―

林 宏美

富士見幼稚園は、大正十三年（一九二四年）から昭和十九年（一九四四年）まで、東京中目黒にあった私立幼稚園である。幼稚園の創立者は大倉洋紙店（現、新生紙パルプ商事）三代目社長の大倉邦彦であった。大倉が大倉精神文化研究所を創設するのは富士見幼稚園の開園から八年後、昭和七年（一九三二年）のことである。大倉は実業家ではあったが、その生涯にわたり、熱心に教育事業にも取り組んだ。富士見幼稚園の開園はその第一歩であったといえる。大倉は、人格形成の根幹となる幼稚園教育が小学校教育に比して軽んじられている現状を憂えていた。そこで自ら幼稚園を開園し、自身の理想とする教育を行っていく。また大倉は、園児たちのみならず、園児の母親や卒園生を対象とした教育活動も展開した。

富士見幼稚園は、昭和十九年（一九四四年）四月、太平洋戦争の戦況悪化に伴う東京都からの保育事業休止の要請を受け入れ、同月末で休園となる。しかし終戦後も再開園は叶わず、そのまま閉園となった。

しかし、富士見幼稚園の資料については、昭和十二年度以降のものを中心として大倉精神文化研究所へ移管されており、現在、研究所の沿革史資料として整理・保存されている。これは昭和九年（一九三四年）に大倉邦彦が行う事業活動の再編により、富士見幼稚園が大倉精神文化研究所の教育事業として位置づけられ、昭和十一年（一九三六年）十二月には研究所が文部省から財団法人の認可を受けたことに伴い、翌十二年から正式に財団の附属幼稚園としたことに関連している。現在、研究所で所蔵している富士見幼稚園関係資料は、富士見幼稚園で作成された後、幼稚園から研究所へ随時移管していたもの、閉園後に幼稚園から研究所に運ばれたもの、研究所内で作成されたものがあると思われるが、各資料の来歴は定かでない。但し、閉園後の資料運搬については研究所の日誌に記述があり、幼稚園閉園後の昭和十九年七月から八月にかけて、数回に分けて運ばれたことがわかっている。

さて、平成二十六年（二〇一四年）は、富士見幼稚園の開園から九〇年、閉園から七〇年という節目の年であった。そこで当財団では同年七月二十三日から十月十八日まで、第二十七回研究所資料展「強く、賢く、親切に―大倉邦彦と富士見幼稚園二〇年のあゆみ―」を開催した。「強く、賢く、親切に」は富士見幼稚園の標語として掲げられていた言葉であり、富士見幼稚園の教育方針を端的に言い表していることから、本資料展のタイトルとした。開場日数は六十一日、会期中の入場者数は、延べ一、三三八人であった。本稿はその展示解説資料に一部加筆訂正を加え、成稿したものである。

なお、富士見幼稚園の概要や大倉邦彦の教育思想については、本誌掲載の大岡紀理子氏、大岡ヨト氏による論稿でその詳細を述べているので、こちらも参照されたい。

【付記】本文のうち、1・2・4・7・9・10は林が執筆した。3は当財団非常勤研究員の小田真裕氏、8は同非常勤職員の中村陵氏がそれぞれ執筆したものに、林が一部加筆訂正を行った。

しあいさつ

大倉精神文化研究所の創立者であり、研究所の本館建物（現、横浜市大倉山記念館）の施主である大倉邦彦は、富士見幼稚園の創立者であり、園長でもありました。大倉邦彦は、幼児期の学びや体験がその後の人間形成に大きな影響を与えると考え、幼児教育の必要性をとなえましました。そして、大正十三年（一九二四年）、その信念を自ら実現するため、東京中目黒に「強く、賢く、親切に」を標語とする富士見幼稚園を開園しました。

富士見幼稚園は太平洋戦争の戦況悪化により、昭和十九年（一九四四年）に閉園を余儀なくされます。しかし富士見幼稚園の教育活動の記録、園児たちが使用した幼児雑誌やおもちゃ、幼稚園経営に関わる資料などは、閉園後に研究所へ移され、現在も大切に保管しています。これらの資料からは、富士見幼稚園での教育の有り様や大倉邦彦の教育理念などを知ることが出来ます。また、戦前の幼稚園に関する記録は、戦災や長い年月の経過に

よって、その多くが失われており、これらの資料は当時の幼児教育の実態を知るうえでも貴重なものであるといえます。

平成二十六年（二〇一四年）は、富士見幼稚園の開園から九〇年、閉園から七〇年という節目の年です。そこで今回は、研究所で所蔵する関係資料から富士見幼稚園のあゆみをたどるとともに、戦前の幼児教育について広く知って頂く展示を企画いたしました。

会期：平成二十六年七月二十三日～十月十八日

主催：公益財団法人大倉精神文化研究所

1 富士見幼稚園の概要

園長 大倉邦彦（写真）

沿革史資料No.6878（複製）

大倉邦彦は、会社社長として利益のみを追求するのではなく、個人の成長の上に会社の発展があり、国家の繁栄があると考えており、社員教育を非常に重要視してい

ました。この社員教育に対する姿勢が、宗教的信念に基づき一貫した人間教育を実現するための教育事業へとつながっていきます。富士見幼稚園の開園は、その最初の一步でした。

幼稚園では邦彦の思いを汲んだ保育者たちが園児の教育にあたりましたが、園長の邦彦も、会社経営や教育事業等で多忙の中、幼稚園を訪れて直接園児たちと触れ合い、日本の未来を担う子供たちの教育にあたりました。



園長 大倉邦彦（沿革史資料No.6878）

富士見幼稚園便覧

沿革史資料No.1552（複製）

富士見幼稚園の概要をまとめた冊子です。今でいう入園要項のようなもので、発行年代によって、形式や内容が若干異なっています。

幼稚園の沿革や保育の方針、保育内容、入園料などの情報が書かれています。

金銭出納帳

昭和八年（一九三三年）～十九年（一九四四年）

沿革史資料No.3624

富士見幼稚園の金銭出納帳です。収入は保育料、支出は教材の購入や行事のための物品購入などさまざまです。

2 富士見幼稚園の開園

大倉邦彦は、幼児期に受けた教育は人格形成の基礎をなす非常に重要なものであると考えていました。しかし、当時の幼児教育は学校教育に比して非常に軽んじられて

いたことから、大倉邦彦は、自らの信ずるところを実現するため、大正十三年（一九二四年）の暮れ、東京府荏原郡目黒町（現、目黒区中目黒）に富士見幼稚園を開園します。

東京府へ提出した幼稚園設立認可申請書類によると、当時の目黒町には幼稚園が一ヶ所しかなく、入園希望者を収容できる施設が少ないこと、さらには付近の発展による人口増加で幼児の数も増え、その保育が緊要であることが述べられています。富士見幼稚園の設立は、地域の要請とも合致したものであったようです。

ここでは開園に関する資料や、開園した頃の幼稚園の資料をご紹介します。

幼稚園設置認可の指令案

大正十四年（一九二五年）十二月二日

東京都公文書館所蔵（複製）

富士見幼稚園の設立認可は、開園よりも四ヶ月程後、大正十四年（一九二五年）四月二十四日に東京府へ申請

され、同年十二月二日に認可されました。

知事からの指令案の備考には、幼稚園周辺や園舎の環境が良好であること、大倉邦彦は充分な資産を持つっており、幼稚園の維持経営に支障がないこと、現在は保母三人で四十五人の幼児の保育にあたり、必要器具類もほぼ備えていることが記されています。

開園した頃の富士見幼稚園（絵ハガキ）

大正十五年（一九二六年）頃

沿革史資料 No.5935（複製）

開園して間もない時期に撮影された富士見幼稚園の全景です。園舎の前には邦彦と園児の姿もあります。

開園から一年余が経った大正十五年（一九二六年）三月、邦彦は精神文化研究所設立の構想を練るため、ヨーロッパの教育施設、宗教施設への視察へ出発します。これは、その視察に際して、邦彦が自身の事業を紹介するために作成した絵ハガキセットのうちの一枚で、右上部には英文の説明が付されています。



開園した頃の富士見幼稚園（沿革史資料No.5935）

年月日欄には「大正」の年号が印刷されていることから、この入学願書は幼稚園を設立して間もない時期に作成されたものだと思います。

子供の家（写真）

沿革史資料No.6851（複製）

この写真には「富士見幼稚園前身 子供ノ家 母親のない子を預る家」というメモがあります。大倉邦彦は富士見幼稚園設立前にこの「子供の家」と称する託児所を設けており、これが発展して富士見幼稚園となったようです。但し、この写真以外に「子供の家」に関する資料は見つかっておらず、詳細はわかっていません。

3 幼稚園の生活

富士見幼稚園で子供たちは、月曜日から土曜日までの週六日間、季節によって若干異なりますが、概ね午前九時から昼食までの時間を過ごしました。当時の資料を見ると、昭和三年（一九二八年）頃は松・桜・梅の三組計

入園願書

沿革史資料No.8235-5（複製）

富士見幼稚園の入学願書です。冒頭にある「**族**」「**平民**」という身分の記入欄に時代を感じます。また、

五〇名余の園児と三名の保母、昭和十年代は四組に分かれた園児たちと五名の保母がいたことがわかります。

ここでは、大倉精神文化研究所が所蔵している資料から、園児たちの富士見幼稚園での日常生活についてご紹介します。

朝の神拝（写真）

沿革史資料No.6760-130（複製）

富士見幼稚園の保育時間は朝九時から始まりました。

下に示した写真は、毎朝九時から三〇分間の「朝の行事」の中で行われた神拝の様子です。厳かな雰囲気伝わってきます。

園庭で遊ぶ子供たち（写真）

沿革史資料No.6760-122（複製）

富士見幼稚園の園庭には、うんてい、ブランコ、滑り台、回転椅子といった遊具があり、子供たちに活用されていました。



朝の神拝（沿革史資料No.6760-130）

幼稚園出席カード

フレイベル館

沿革史資料No.5370（複製）

富士見幼稚園で使われていた出席カードです。

幼稚園生活調査

昭和十三年（一九三八年）

沿革史資料No.5376（複製）

富士見幼稚園では、園児の保護者に対して、子供の登園の態度や家庭での様子について調査を行っています。

子供たちは、富士見幼稚園にどんな気持ちで通っていたのでしょうか。保護者たちの回答から、園児たちの多くが、幼稚園で友達と会うことを楽しみにしていたことがわかります。（下表参照）

富士見幼稚園通信帳

沿革史資料No.5386（複製）

富士見幼稚園では、幼稚園と家庭とが「相倚り相扶けてこそ幼児教育の完全が期せられる」という考えに基づき、「通信帳」によって家庭との連絡をはかっていました。「空襲ノ場合」が想定されている点に、当時の時代性を見て取れます。

富士見幼稚園がまとめた生活調査の結果

1. 登園についての態度（好む理由）		
友達がある	20	
遊戯・手技	7	
面白いから	5	
2. 幼稚園生活の一日を発表するか		
する	56	内訳：手技、唱歌、遊戯、友達、先生の話、特別な出来事
しない	14	
3. 睡眠		
熟睡	全員	就寝時間：7時～9時、起床時間：5時半～8時
4. 家庭で遊ぶ状態		
朋友と遊ぶを好む		朋友の内訳：園児、近所の子供
内遊び		内訳：絵本、積木、絵かき、ままごと、幼稚園ごっこ、人形、玩具
外遊び		内訳：砂場、野球、三輪車、滑り台、兵隊ごっこ、相撲
5. 躰について困ること		
我が侶、強情、乱暴、すねる、泣く、言うことをきかぬ、返事をしない、はっきりしない、言葉づかい、挨拶をきらう、物を粗末にする、整頓しない		
6. 芝居活動（ニュース映画を含む）		
つれてゆく	37	
ゆかぬ	32	
7. 休園の日		
家で遊ぶ（兄弟・朋友と）、家畜の世話		
外出（散歩、遊園地ゆき、デパート、ニュース映画）		
8. 矯正したいこと		
我が侶、かんしゃく、強情（我が強い）、短気、泣き易し怒り易し、はっきりしない、内気、落ち着かない、挨拶しない、はにかむ、言葉づかい、左利き、物をかんだりしゃぶったり、神経質、ぐずる（小言を言う）、嘘をつく、道草する、金銭づかいする、偏食、言うことを聞かぬ、返事をしない、自分の事は自分で		

富士見幼稚園週間日程表

昭和十七年（一九四二年）七月第三週

沿革史資料No.5367（複製）

富士見幼稚園では、一日ごとに決められた「主題」に沿った教育が行われていました。この年の夏は、とても暑かったのでしょうか。当初の予定を変更したり、水鉄砲で遊ばせたりしています。

4 幼稚園で行われたさまざまな行事

富士見幼稚園では、年間を通してさまざまな行事が催されてきました。入園式に始まり、遠足、ひな祭り、端午の節句、七夕祭り、芋掘り、運動会、卒業式など、今でも幼稚園や学校等で行われている行事の他、明治節奉祝式や紀元節奉祝式、教育勅語渙発式など、時代色の濃いものもあります。

また、幼稚園では同窓会も催され、卒業生たちが懐かしい園舎や、大倉山の研究所に集まって、楽しい時間を過ごしました。

研究所にはこれらの行事の写真やプログラムなども残っています。また、昭和九年（一九三四年）から研究所で発行していた修養雑誌『躬行』の誌面で、その様子が紹介されることもありました。ここではそれらの資料から幼稚園の行事について見ていきます。

端午の節句（写真）

沿革史資料No.6760-0107（複製）

園児たちの後方、神棚の下に五月人形が飾られています。向かって左側の黒板には「僕等のお節句」「鯉のぼり」「金時さんなら」など、端午の節句にちなんだ当日の次第が書かれていることが見て取れます。

学芸会（写真）

昭和十一年（一九三六年）

沿革史資料No.6873（複製）

富士見幼稚園で行われた学芸会の写真です。前方に並んだ女の子たちはみんなおめかしをしています。

多摩川での芋掘り (写真)

昭和十三年 (一九三八年) 十月二十六日

沿革史資料No.1003 (複製)

多摩川河畔での遠足芋掘りの写真で、研究所発行の修養雑誌『躬行』第五十九号 (昭和十三年十二月一日) に掲載されたものです。写真右奥の鉄橋は東急東横線の多摩川橋梁でしょうか。

ひな祭り (写真)

昭和九年 (一九三四年) 三月三日

沿革史資料No.6760-121 (複製)

昭和九年 (一九三四年) のひな祭りの写真です。研究所発行の修養雑誌『躬行』の記事によれば、園児たちは園長先生 (大倉邦彦) のお話の後に遊戯を行い、お菓子をもらって帰ったようです。園児たちが手に持っている紙袋がそのお菓子でしょうか。

ひなまつりプログラムの案

昭和十八年 (一九四三年) 二月二十一日

沿革史資料No.6450 (複製)

幼稚園の活動や教育方針などを相談する幼稚園協議員会で決定したひなまつりのプログラム案です。戦争のさなかでも日本の年中行事であるひなまつりのお祝いを通して、園児やその親たちと情味ある一時を持ちたいという思いが込められていました。

第二回卒業生 (写真)

昭和二年 (一九二七年) 三月

沿革史資料No.6866 (複製)

富士見幼稚園第二回卒業生三十二名の集合写真です。園児たちはみんな緊張の面持ちです。二階の窓から撮影の様子を眺めている子供の姿も見えます。園長の邦彦は挿入写真なので、撮影当日は欠席していたようです。

保育証

沿革史資料No.8235-07 (複製)

卒業式で園児に渡される保育証です。印刷された年号が「大正」であることから、大正十五年（一九二六年）に行われた第一回目の卒業式に際して作成されたものだと思います。

年中行事一覧表

昭和十七年（一九四二年）以降

沿革史資料No.5385（複製）

昭和十七年（一九四二年）以降のものと見られる年中行事一覧表です。幼稚園の夏休みにあたる八月を除いて、毎月必ず行事があります。今の学校や幼稚園などでも行われる運動会や遠足の他に、時代性を感じさせる行事も見受けられます。

同窓会開催の通知

昭和八年（一九三三年）六月

沿革史資料No.6873（複製）

富士見幼稚園の卒業生宛の同窓会通知です。子供たち

が読みやすいようカタカナで書かれています。「イナカノヤマノウエ」の大倉精神文化研究所に子供たちが集まり、運動会や活動写真（映画）に楽しい時間を過ごしたことでしよう。

第十二回富士見幼稚園同窓会（写真）

昭和十一年（一九三六年）十月二十五日

沿革史資料No.6873（複製）

富士見幼稚園では、幼稚園や大倉精神文化研究所を会場に同窓会を行っていました。再会のひとときは邦彦にとって自分の子供が帰ってきたように嬉しいものでした。

5 富士見幼稚園の教育

富士見幼稚園では、他園の真似や本の内容をなぞるだけの教育を避け、園児たちと直接触れあい、心の中に飛び込む事で得られた理解と体験を基礎として教育が行われました。

大倉精神文化研究所には、幼稚園の保母たちの手によ

る日々の記録、週間予定表、教育方針を話し合った幼稚園協議委員会の記録や、実際に園児たちが使用していた教材などが残されており、その教育内容の一端を垣間見ることが出来ます。

ここでは、これらの資料を通して富士見幼稚園で行われていた教育について見ていきたいと思えます。

六月末日の保育課程表

大正十四年（一九二五年）六月

東京都公文書館蔵（複製）

東京府への幼稚園設立認可申請の際に提出された保育課程表です。園児たちは遊戯や唱歌の他、自由画、粘土、切紙、草取・花取など、様々な内容に取り組んでいたことがわかります。

『豆細工と組紙』小学校手工科家庭用指導書

鈴木江南著、昭学社

昭和三年（一九二八年）一月十五日

沿革史資料No.9183（複製）

豆と竹ひごを使って様々な形をつくる「豆細工と、二枚の紙を組み合わせて模様を作る組紙の指導書です。

園児たちが読んでいた幼児雑誌

沿革史資料No. 9178、10444、10483、10587、

10612、10614、10616、10618

大倉精神文化研究所では、富士見幼稚園の園児たちが読んでいた幼児雑誌を約一八〇冊余所蔵しています。

しかし、その多くは、破れや落書きがあったり、表紙や中のページがなくなっていたりします。これは、富士見幼稚園の園児たちが、雑誌を夢中になって読んでいた証拠ともいえるでしょう。

『観察絵本キンダーブック』第一輯第六編「犬の巻」

フレール館

昭和三年（一九二八年）十一月

沿革史資料No.10491（複製）

キンダーブックは昭和二年（一九二七年）に創刊され

た幼児雑誌で、幼稚園令で定められた保育項目の一つである「観察」を主眼に置き、身の回りの様々な事物を園児たちにわかりやすく伝えられるよう編集されています。これは研究所で所蔵する一番古いキンダーブックです。

ちなみに、創刊時のキンダーブックに使用されていた紙は、大倉邦彦が社長を務める大倉洋紙店が卸していました。

『童謡小曲第十集』

中山晋平編、山野楽器店

昭和四年（一九二九年）八月十日

沿革史資料No.9187（複製）

富士見幼稚園で使用していた童謡集です。「証城寺の狸囃子」はお月見の季節に歌われていました。

かるた

昭和十年（一九三五年）十月二日

沿革史資料未登録

仁成堂書店（現、鈴木出版）発行のいろはかるたです。既に無くなってしまった札もありますが、「斗」や「京」などの札に時代を感じます。

園庭での作業（映像）

沿革史資料No.6748-1（複製）

富士見幼稚園の園児たちの様子を記録した映像からの一コマです。園児たちは鉛筆やクレヨンを手作業をしています。ぬりえでしょうか、あるいはお絵かきでしょうか。天気の良い日はこのように外に机を並べて作業をすることもあったようです。

園児募集チラシ

昭和十一年（一九三六年）以降

沿革史資料No.8221-7（複製）

富士見幼稚園の概要がまとめられた園児募集チラシです。「強く、賢く、親切に」の標語は、幼稚園における

教育方針の柱といえるものでした。

『ヌリエ No.2』

及川ふみ、フレーベル館

昭和十二年（一九三七年）

沿革史資料No.9192-5（複製）

実際に園児が使用したぬりえの本です。園児たちは保母がその時々に合わせて指示した絵柄に色を塗っていたようです。

昭和十三年四月二十二日の報告

沿革史資料No.1539（複製）

この年の入園児が初めてのぬりえをした日の記録です。クレヨンの使用法や塗り方の指導をした後、たんぼぼの絵に色を付け、楽しく過ごした様子が窺えます。また、唱歌の時間にも「たんぼぼ」という歌を歌っています。ぬりえは、造形などを行う保育項目である「手技」の教材として一般的なものでした。

昭和十三年年度の報告書

沿革史資料No.1539、1540、1544

報告書は幼稚園での日々の記録です。その日に行った保育内容や所感、園児の出欠席者数などが、保母によって詳細に記されています。

昭和十四年度の予定表

沿革史資料No.1542、1543、1545

予定表は一週間毎の指導計画を書いたもので、現在では「週案」という名称が一般的です。

昭和十五年年度第二学期第三週の予定表

沿革史資料No.5394（複製）

昭和十五年（一九四〇年）九月二十五日から三十日まででの予定表です。記載項目の「談話」「観察」「唱歌」「遊戯」「手技」は、幼稚園令施行規則（大正十五年制定）で保育項目として定められたものです。また、予定表には「躰」という項目があり、他の保育項目と同様の扱い

で、社会生活の中で守るべきルールや、様々な作法などが教えられていたことがわかります。

「オヤクソク」

昭和十七年（一九四二年）頃か

沿革史資料No.5384（複製）

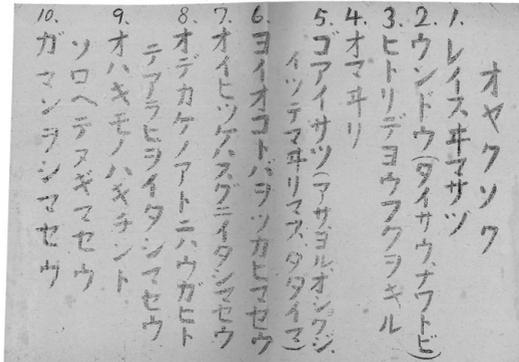
「オヤクソク」は、夏休みに際して配布されたカリ版刷りの印刷物です。冷水摩擦、運動、着替え、お詣り、挨拶、うがい・手洗いなどの十項目が書かれています。

富士見幼稚園では、幼稚園での教育と家庭での教育は一致していなければならないと考えていました。この「オヤクソク」は、夏休み中も園児たちが幼稚園のような規則正しい生活を意識して毎日をごらせるように配布したものと思われまます。

幼稚園協議員会の記録

昭和十八年（一九四三年）四月十八日

沿革史資料No.6450（複製）



「オヤクソク」（沿革史資料No.5384）

幼稚園では関係者数名を幼稚園の協議員として、園長、保母らと毎週一回会合を開き、幼稚園における教育内容について話し合いを行いました。協議員会の記録を見ると、幼稚園での教育や生活指導は、現場の意見を取り入れながら、明確な目的意識を持ったうえで行われていたことがわかります。

恩物

沿革史資料未登録

「恩物」は、世界で初めて幼稚園を創設したドイツの教育学者、フレーベルが考案した教育遊具です。「恩物」はドイツ語の「Gabe」（神から幼児に授けられた物）から訳されました。

恩物はもともと第一恩物から第二十恩物までありますが、日本では第十恩物までを恩物といい、第十一から第二十恩物を手技工作といえます。

恩物は木や紙、布などで出来ており、球や立方体、面や線などで構成されています。それらの恩物を子供たちが組み合わせて遊ぶことで、思考力、創造力、認識力、集中力など、さまざまな能力を伸ばすことが出来るよう考えられています。

ブロックスカパー

沿革史資料未登録

その名のとおり、積み木と車です。積み木を入れる容

器が紐のついた台車になっており、子供たちが引っ張って運べるようになっていきます。思考能力と運動能力の両方を高めることが出来る積み木と台車の組み合わせは、子供にも大人にも支持されています。

粘土遊びの道具一式

沿革史資料未登録

粘土、へら、のばし棒、製作品の見本カードが一揃いになっています。

羽子板

沿革史資料未登録

女の子の絵が描かれた羽子板です。

新式名数計算用具模型カード

沿革史資料未登録

算術教育研究会選定、大日本国民教育研究会発行のカードです。詳細については不明ですが、物の数え方や、

計算の仕方などを学ぶための教材だと思われています。

カードの裏は少し毛羽だった布のような手触りで、取付盤に貼り付けて使用したようですが、取付盤は残っていません。

6 園児たちの過ごした施設

富士見幼稚園では、大正十四年（一九二五年）に園舎が完成しました。その後、入園児の増加で園舎が手狭になったことから、昭和十一年（一九三六年）に園舎を建て替えています。また、その後も園舎は増改築や塗り替えなどを行っていました。

園舎や園庭といった幼稚園施設については、写真や図面などが研究所に残っています。

園児たちは毎日どんな場所で、話し、学び、遊んでいたのでしょうか。ここでは富士見幼稚園の施設について見ていきましょう。

富士見幼稚園校地校舎平面図

沿革史資料No.8235-2（複製）

大正十四年（一九二五年）に完成した最初の園舎の平面図です。部屋の間取りを見ると、二階が保育室になっていますが、幼稚園設立認可申請の際、東京府から「二階を保育用に供するは穩当ならず」との意見があったことから、二階は主任保育母の住宅として使用し、園児たちの保育には一階を使用しました。

富士見幼稚園設計図（縮尺百分の一）

沿革史資料No.3625-2（複製）

初代園舎の設計図です。前出の平面図（沿革史資料No.8235-2）では一階に保育室二室がありますが、こちらではその場所が教室に変更されています。園舎は二階建てで、建物を取り囲むように運動場があり、周囲には竹垣が張り巡らされていました。

園舎の前での集合写真

沿革史資料No.8214（複製）

園児の数や先生たちの顔ぶれから、開園して間もない頃の写真と思われます。園児たちの後ろに見えるのが園舎の遊戯室（講堂）部分です。左側にはすべり台、右側にはわずかに築山が見えています。

遊戯室（講堂）での神拝（写真）

沿革史資料No.6760-133（複製）

園児たちの神拝の様子です。場所は初代園舎の遊戯室（講堂）で、正面には神棚、国旗、明治・大正それぞれの天皇后の御真影が掲げられており、当時の時代性を見て取れます。

園庭の遊具で遊ぶ子供たち（写真）

沿革史資料No.6760-112（複製）

園舎が建て替えられる前、昭和十一年（一九三六年）以前の写真です。写真から、園庭にはブランコや回転遊具、太鼓梯子（うんてい）などを設置していたことがわかります。



園庭の遊具で遊ぶ子供たち（沿革史資料No.6760-112）

富士見幼稚園遊戯室外景

沿革史資料No.5935-4（複製）

昭和十一年（一九三六年）に建て替えられた園舎の着色写真です。建物はピンクで色づけられています。遊戯室部分の外景を写したもので、上部には富士山をモチーフとした富士見幼稚園の園章が掲げられています。

屋外での昼食（映像）

昭和十一年（一九三六年）三月二日

沿革史資料No.6749-3（複製）

富士見幼稚園の記録映像「富士見幼稚園 明朗篇」からの一コマです。昭和十一年（一九三六年）に完成した二代目園舎のテラスで園児たちが昼食を食べています。園児たちは、家庭からお弁当としておかずだけを持参し、主食のご飯は幼稚園で炊いたものを配膳していました。

富士見幼稚園の入口、すべり台（写真）

昭和十六年（一九四一年）頃

沿革史資料No.1037（複製）

『躬行』第八十五号（昭和十六年二月一日）に掲載された富士見幼稚園の写真です。幼稚園が出来た頃にあったすべり台は真つ直ぐ滑り降りる形でしたが、この写真のすべり台は曲がりくねった複雑な形をしています。遊具も年を経て新調しているようです。園児たちは夢中になって遊んでいます。

富士見幼稚園敷地並建物配置図

昭和十七年（一九四二年）頃

沿革史資料No.6039-2（複製）

昭和十七年（一九四二年）頃の幼稚園の建物配置図です。初代園舎の設計図（沿革史資料No.3625-2）と比較すると、建物配置の変化がわかります。赤線に囲われた部分にあった別棟は、昭和十七年（一九四二年）に、新たに取得したものでした。

富士見幼稚園園舎建物図

昭和十七年（一九四二年）頃

沿革史資料No.6039-5（複製）

昭和十七年（一九四二年）頃の園舎の間取図です。園舎は二階建てで、渡り廊下を挟んで二棟に分かれていたことがわかります。また、この他に母子図書館と保育室を備えた別棟があり、保育室は合計五室ありました。初代園舎の二室と比較すると、その数は倍以上になっており、多くの園児たちを受け入れていたことが窺えます。

7 富士見幼稚園と大倉精神文化研究所

富士見幼稚園は当初、大倉邦彦個人の私設幼稚園として開園しましたが、昭和十二年（一九三七年）より大倉精神文化研究所の附属幼稚園となります。昭和七年（一九三二年）に設立された大倉精神文化研究所は、昭和十一年（一九三六年）十二月に文部省所管の財団法人として認可されましたが、その際には財団の事業として、富士見幼稚園の経営も寄附行為で謳っています。

ただし、附属となる前から富士見幼稚園と研究所との関わりは深く、幼稚園の遠足では、毎年のように園児たちが研究所を訪れています。

また、研究所の研究員が幼稚園で話をしたり、研究所附属寮の富嶽荘に寄宿する大学生らが、幼稚園の行事の手伝いや、卒園生を対象とした「富士見日曜学校」の指導にあたることもありました。

竣工前の研究所への遠足（写真）

昭和六年（一九三一年）十月二十八日

沿革史資料No.6760-132（複製）

竣工前の大倉精神文化研究所本館（現、横浜市大倉山記念館）を背に、造成中の前庭で撮影された集合写真です。邦彦と園児たちは両手を挙げてバンザイをしています。富士見幼稚園では、遠足や運動会など毎年折に触れて、研究所を訪れています。

遠足当日の「富嶽荘日誌」

昭和六年（一九三一年）十月二十八日

沿革史資料未登録（複製）

「富嶽荘」は研究所の附属寮で、現在、大倉山記念館の西北にあるピクニック園地の場所に建物がありました。荘生たちは共同生活を送りながら、精神修養や勉学に励むと同時に、研究所の開設備段階からその運営を担う存在でもありました。

その富嶽荘の荘生たちが記した遠足当日の日誌には、大倉山での園児たちの様子が詳細に書かれており、当日の賑やかな様子が伝わってきます。

十月二十八日 水 晴

宮本記

午前十時頃、富士見幼稚園の遠足にて園長先生に引率され、一行百名位大倉山を訪れ、山は時ならぬ賑ひを呈す。園児よりも附添の人々が多い位で、午前中は裏山で芋掘り、午後は大きい人々は研究所内部の見学等し、小さい人々は喜々と走り廻つて遊んで居る。富嶽荘としては紙鳶たこをあげて小さい友達を悦ばす。併し風強く牟田兄苦心の紙鳶は糸切れて行方不明、江下兄のは二つ共墜落の止むなきに至つた。午后三時頃一同秋の一日の楽しい印象を胸に納めて、研究所玄関前で記念撮影の後下山す。

富士見幼稚園十周年記念(写真)

昭和九年(一九三四年)五月六日

沿革史資料No.6936(複製)

富士見幼稚園は昭和九年(一九三四年)五月六日に創立十周年を迎えました。当日は大倉精神文化研究所に、幼稚園の園児、その父兄や卒業生、研究所関係者、来賓、総勢四五〇名が集まりました。



富士見幼稚園十周年記念(沿革史資料No.6936)

当日は午前中に研究所で記念式典を行い、午後は近くの大綱小学校で運動会を行い、楽しい時を過ごしました。

「一粒の種子」(『躬行』第四号、昭和九年六月一日)

沿革史資料No.849 (複製)

富士見幼稚園十周年記念の催しについて伝える記事です。当日は中目黒の富士見幼稚園から、二台の貸し切り電車に分乗して大倉山へ来たことがわかります。また、記念式典の様子や昼食の献立など、当日のことが詳しく書かれています。

高松宮殿下御台臨記念写真

昭和十五年(一九四〇年)五月三十日

沿革史資料No.6855 (複製)

昭和十五年(一九四〇年)五月三十日、昭和天皇の弟にあたる高松宮宣仁親王が研究所を視察されました。当日は富士見幼稚園の園児たちも研究所に集まり、高松宮殿下の前で遊戯を披露しています。

大倉山記念館の前庭では、御台臨を記念して植えられた梅が大木に成長しており、「高松宮台臨記念樹」と刻まれた白御影石の標柱とともに、その歴史を伝えていきます。

運動会挙行案内

昭和十六年(一九四一年)十月二十一日

沿革史資料No.8235-16 (複製)

秋の遠足を兼ねた運動会の挙行案内です。場所は大倉山の大倉精神文化研究所となっています。

運動会次第

昭和十六年(一九四一年)十月二十六日

沿革史資料No.8235-17 (複製)

大倉精神文化研究所で行われた運動会のプログラムです。歌、体操、競争に綱引きと盛りだくさんの内容です。競技の多くは男女別に行われていました。種目の中には、「父兄所員職員競争」もあり、研究所の所員たちも運動

会に参加していたようです。

設立者変更認可の申請

昭和十七年（一九四二年）一月十五日

沿革史資料No.8235-22（複製）

富士見幼稚園の設立者を、私人の大倉邦彦から、財団法人大倉精神文化研究所理事長の大倉邦彦へと変更した際の申請書の写しです。この申請は昭和十七年に東京府へ提出されましたが、実際には昭和十二年度から、財団附属の幼稚園として運営されていきました。

8 富士見日曜学校と富士見少年団早起会

大倉邦彦は、学校教育が知識偏重に陥り、社会に様々な弊害が起こっていると考えていました。そこで卒園生を中心として満六歳から十七、八歳までの男女を対象に、学校教育の不備を補い、宗教的情操教育を基礎として、博愛、奉仕の精神を培い、国家愛を伝えることを趣旨とする富士見日曜学校を昭和四年（一九二九年）二月十七

日に開校しました。日曜学校は、年齢毎にクラスを分け、幼稚園の保母や研究所員、大学の学生たちが担任となって子供たちを指導しました。

その後、昭和九年（一九三四年）一月二十一日から富士見日曜学校は富士見少年団早起会と名称を変更し、活動場所も富士見幼稚園から大鳥神社（下目黒）に移しました。以後も活発な活動を展開しましたが、昭和十六年（一九四一年）の目黒銃後少年団の結成に伴い、そこに合流することとなりました。

『富士見日曜学校』第一報

昭和四年（一九二九年）二月十六日付

沿革史資料No.5949（複製）

開校前の昭和四年（一九二九年）二月十三日、日曜学校の教師たちが大倉邦彦宅に集合し、運営方針などを取り決めた教師打合会を実施しました。これは打合会の内容を伝える記事です。第二号以降は日曜学校の活動内容を伝える学校だよりとして、二十号（同年九月二十九日）

まで続きます。

富士見日曜学校入学願書

沿革史資料No.8218-39 (複製)

日曜学校は、参加する子供たちから月謝を取らず、無償で開催していました。また、教師たちも無報酬で授業を受け持っていました。

富士見日曜学校九品仏遠足にて (写真)

昭和四年 (一九二九年) 十月十三日

沿革史資料No.6873 (複製)

この写真は、昭和四年 (一九二九年) 十月十三日に世田谷区にある九品仏へ行った時の写真です。

『心の使』第一号

昭和四年 (一九二九年) 十一月二十日

沿革史資料No.7085 (複製)

『心の使』は、前掲の『富士見日曜学校』(No.5949)を

引き継ぐ形で、日曜学校での活動を載せていた機関誌です。翌五年 (一九三〇年) 五月の第三号まで刊行されました。本誌には農村工芸学院や研究所建設の様子など、大倉邦彦の諸事業の記事なども含まれています。

富士見日曜学校日記ノート

昭和四年 (一九二九年) 十二月一日付

沿革史資料No.6683 (複製)

日曜学校では、担当教師がその日の講義で使用した教材や講義目的などをノートに書き残していました。ナイチンゲールやグリム童話など、小学生にわかりやすい教材を使っていました。担当教師の中には、昭和十一年 (一九三六年) の二・二六事件で死刑に処せられた渋川善助の名も見られます。

『心の使』第二号

昭和五年 (一九三〇年) 一月二十日

沿革史資料No.1575 (複製)

大倉邦彦は、昭和四年十二月一日の日曜学校で子供たちに、「何故お家に神棚や仏壇があるか」その理由を紙に書いて、来週の日曜学校の際に持つてくるよう伝えていきます。このように日曜学校では、教師の講義・講話のみならず、宿題を課すこともありました。

児童回答用紙（抜粋）

昭和四年（一九二九年）十二月八日

沿革史資料No.5949（複製）

「何故お家に神棚や仏壇があるか」という課題に対する子供たちの直筆の回答用紙です。様々な回答が寄せられたことがわかります。

富士見日曜学校秋季遠足（写真）

昭和六年（一九三一年）十一月二十九日

沿革史資料No.6935（複製）

日曜学校では、講話・遊戯のほかに遠足も実施していました。この写真は、昭和六年（一九三一年）の秋季遠

足で大倉山を訪れた際のもので、背後には、翌七年竣工予定の大倉精神文化研究所本館（現、横浜市大倉山記念館）が写っています。

9 富士見学びの会

「富士見学びの会」は、富士見幼稚園に在籍する園児たちの母親学級の名称です。

大倉邦彦は、幼稚園は家庭の延長であり、園児への教育効果を高める為には、幼稚園の教育と家庭の教育の一致が必要であると考えていました。そして家庭における中心的指導者は母親であり、その存在は子供の教育に大きな影響を与えることから、母親自身の思想向上と人格錬磨も重要なものと考えていました。

富士見幼稚園では開園当初から園児の家庭と幼稚園との連絡を計るために、毎月一回保護者会を開いていましたが、それが発展して「富士見学びの会」となりました。後には園児の母親以外に、会の趣旨に賛同した女性を加えたものとなります。

学びの会は木曜日に開かれ、邦彦の修養講話、料理・裁縫などを行う趣味会の他、休日には社会奉仕を目的としたバザーなども行っていました。

学びの会は昭和十五年（一九四〇年）十月に解散しますが、以後も園児たちの母の会は存続し、同様の活動を続けていました。

学びの会のしおり

沿革史資料No.7381（複製）

学びの会の趣旨や誕生の経緯、活動内容などをまとめたリーフレットです。第一、第三木曜日の修養講話、第二、第四木曜日の趣味会と、多様な活動を展開していたことがわかります。

富士見学びの会会員と製作品（写真）

沿革史資料No.8214（複製）

富士見学びの会では、会員相互の親睦をはかる趣味会として、手芸や洋裁などの教室も行っていました。写真

の中で並べられている洋服も、趣味会で作られたものと思われまます。

学びの会記録帖

昭和八年（一九三三年）九月

十五年（一九四〇年）十一月

沿革史資料No.5746（複製）

昭和八年（一九三三年）から昭和十五年（一九四〇年）までの活動記録です。表紙には「幹事記入 所持ノ事」とあり、会合で聴いた修養講話の内容や、趣味会の製作品、参加者数、行事のプログラムなど、その時々のお合の様子の詳細に書かれています。

学びの会十周年記念写真

昭和十一年（一九三六年）五月十六日

沿革史資料No.6935（複製）

学びの会十周年の感謝会の際に撮影された記念写真です。感謝会は午前十一時から富士見幼稚園を会場に行わ

れ、邦彦や学びの会の会員ら一〇六名が参加しました。その様子は動画でも撮影され、今も研究所で保存しています。

学びの会十週年感謝会の記録

昭和十一年（一九三六年）五月十六日

沿革史資料No.5746（複製）

「学びの会記録帖」に書かれた感謝会当日の記録です。会の次第、邦彦や幼稚園の保母たちに贈呈した記念品、会の様子や当日の段取りの反省等、事細かに記載されています。

学びの会会報

昭和九年（一九三四年）四月～七月

沿革史資料No.5384（複製）

会員に配布された学びの会の会報です。例会の概略が記されています。

戦後の集合写真

昭和三十八年（一九六三年）十一月九日

沿革史資料No.6873（複製）

学びの会会員たちの集合写真です。写真裏面に記載された日付から、昭和三十八年（一九六三年）十一月九日に撮影されたことがわかります。

学びの会解散から二十五年、富士見幼稚園の閉園から二十年近い年月が経過した後も、会員同士の交流、邦彦とのつながりは維持されていたようです。

10 富士見幼稚園の閉園

太平洋戦争の戦況が日増しに悪化していく中、昭和十九年（一九四四年）四月八日、富士見幼稚園では入園式が行われます。しかし、それからわずか十一日後の同月十九日、現下の情勢に鑑みて当分の間保育事業を休止するよう東京都から通達が出されます。邦彦は通達を受け、四月末で幼稚園を休園することを決定し、翌五月日に休園式を執り行います。

それから一年三ヶ月後、昭和二十年（一九四五年）八月に戦争は終わりました。園舎は何とか戦災を免れましたが、社会変革や経済統制といった戦後の混乱の中で、富士見幼稚園の母体である研究所の財政状況は困窮を深めていきます。研究所では富士見幼稚園の園舎をはじめ、所有していた施設の賃貸を財団運営資金の獲得手段とします。

しかし、財政の逼迫はその後も改善されることなく、昭和二十三年（一九四八年）十二月七日に行われた財団の理事会で、幼稚園園舎の売却処分が決定します。

その後、昭和二十五年（一九五〇年）に富士見幼稚園は極東福音十字軍（現、セント国際宣教団）に売却されました。

幼稚園休園届の件

昭和十九年（一九四四年）四月二十七日

沿革史資料No.1620-22（複製）

東京都へ提出した幼稚園休園届の写しです。東京都の

他、神奈川県や文部省宛にも届け出をしています。幼稚園の保育事業休止は「当分の間」と書かれています。終戦後も再開することは叶いませんでした。

休園式当日の日記

昭和十九年（一九四四年）五月五日

沿革史資料No.6450「日記」（複製）

富士見幼稚園では、昭和十九年（一九四四年）五月五日に休園式を行いました。この日は、開園二十周年記念日の前日で、そこに大倉邦彦の無念の想いが読みとれそうです。

会場の人々は長期休園を惜しみつつも、神話や唱歌、人形芝居で最後の一日を楽しく過ごしました。

『家の光』

昭和二十一年（一九四六年）～二十三年（一九四八年）

大倉精神文化研究所附属図書館蔵書（複製）

『家の光』は社団法人全国農業会家の光協会（現、一

般社団法人家の光協会）が発行している雑誌です。

富士見幼稚園の建物は、昭和十九年（一九四四年）の休園後から昭和二十四年（一九四九年）九月まで、家の光協会に貸与されていました。研究所附属図書館では、昭和二十年代から四十年代に発行された『家の光』を所蔵していますが、これはそうしたつながりによるものと思われれます。

売買契約書

昭和二十五年（一九五〇年）九月二十一日

沿革史資料No.5397-15（複製）

富士見幼稚園の土地と建物の売買契約書の写しです。

売却先の極東福音十字軍は、当時、GHQの許可を得て日本で活動していたアメリカの宗教団体で、現在は「センド国際宣教団」と改称しています。

富士見幼稚園のあゆみ

年 月	事 項
大正13年5月6日	富士見幼稚園創立
大正13年暮	富士見幼稚園開園
大正14年4月24日	幼稚園園舎落成、文部省認可（実際は4月24日に申請を行い、12月2日に認可）
昭和2年4月	園児母親の修養会「富士見学びの会」発足（大正15年の誤りか）
昭和4年2月17日	卒園生を主な対象とした「富士見日曜学校」開校
昭和9年1月21日	「富士見日曜学校」を發展させ、「富士見少年団早起会」を結成
昭和9年5月6日	富士見幼稚園開園10周年、大倉精神文化研究所で記念式典を行う
昭和11年3月21日	新園舎落成
昭和12年	大倉精神文化研究所の財団法人化に伴い、研究所の附属幼稚園となる
昭和15年10月28日	「富士見学びの会」解散（以後も園児の母の会は存続し、同様の活動を展開）
昭和16年4月3日	保育内容の充実のため、園長、保母および関係者等による幼稚園協議員会を設置し、第1回目の協議員会を開催
昭和16年6月18日	幼稚園に特技指導者として体育嘱託を置く
昭和16年12月28日	「富士見少年団早起会」開催、以後「目黒銃後少年団」と合流
昭和17年1月以降	随意科として、絶対音感を基調とする音楽（ピアノ）教授を開始
昭和17年2月26日	特技指導者として絵画・彫刻嘱託を置く
昭和19年4月27日	富士見幼稚園、東京都の通達を受けて4月末での休園を決定
昭和19年5月5日	休園式